

自分の存在に感動する

——南無阿弥陀仏——

名倉 幹

光華のみなさん、こんにちは。はじめまして。私は名倉幹と申します。みなさんは一年生でいらっしゃいますか。今日はお若い学生さんの前でお話しをするということで、非常に緊張しておりますが、森際さんからのご縁で、みなさまの前で仏様の話をする機会を賜りまして本当に喜んでおります。

それでは、初めてでございますので、私自身がどういう人間か、そこから話しをさせていただきます。私は生まれは、そこ、でございます（笑い）。桂でございます。阪急桂駅の前に産婦人科がございますけれども、私はそこで生まれました。一九六二年で、今、六十一歳です。先ほど学園の歌に「桂川」と出てきまして、私は涙が出てきました。生まれた家は桂川のそばにあつたんです。国道九号線をずっと西の方へ、橋を渡って土手を左に

行ったところに私が八歳まで過ごした家がありまして、今日ここに来させていただいたのも、ふるさとに帰って来たような気持ちであります。実は、私はみなさまの先輩になります。光華女子学園を卒園しているんです。どういうことかわかりますか。隣の光華幼稚園を出たんです。ですから、みなさまと出会えるということに、ただならぬご縁を感じております。今日は本当に嬉しい機会をいただきました。

ご紹介いただきましたように、私はアメリカ生活が長くて、もう十五年アメリカにおります。今はニューヨークにおりまして、十一年目になります。その前、二〇〇八年から四年間は、東本願寺ハワイ別院にありました。ハワイに東本願寺があるんです。今日、私はみなさまにどういう話をしようかと思っております。私自身こうして仏教の大学で、僧侶として仏様の話をするということに言葉では言えない喜びを感じております。と言いますのは、私はお寺さんの生まれじゃないんです。普通のサラリーマンの家に生まれましたが、こないして坊さんになってしまったんですね。それが何でか、ということでございます。よほどのご縁があったわけなんです。

私は、普通のサラリーマンの親父とお袋の間に生まれて、その桂で八歳まで過ごしました。そして、大学当時はアメリカに憧れておりました。特にアメフトをやりたいかったん

自分の存在に感動する

です。アメリカンフットボールに非常に燃えておりました。そして、一浪しまして神戸大学に入学できたんです。関西では、京大とか、関西学院大学とか、立命館が強いんですけど、神戸大学も、四位、五位くらいで、関西では強い方なんです。私の第一志望は京大でしたけれども偏差値が足りなくて入れませんでした。しかし、一浪して神戸大学に入學



できました、入学発表と同時にアメフト部に入りました。僕は本当にアメフトに燃えておりました。アメフトで活躍して、将来アメリカへ渡ってプロになって、アメリカの女性にモテたいと、そのような考えを持っておりました（笑い）。

念願が叶って、大学の四年間はそのアメフトに打ち込みました。今はこれだけ細いですが、大学時代はガチッとしておりまして、筋肉隆々で何も怖いものはありませんでした。いっぺんヤクザに絡まれて、しばかれましたけれども、全然痛くなかったです。それぐらい私は体を鍛えまくっておりました。自信満々でした。

みなさんは大学一年生、入ったばかりで、将来何をやるかとか考え中だと思いますけれども、私はアメフトをやっていて、ここ（頭）が悪いということと一年留年いたしましたけれども、自分の一番行きたかった会社に内定をもらったんですね。日本でその当時一番大きい鉄鋼メーカー、新日本製鐵、今は日本製鐵という会社でございますが、当時は世界の製鉄会社で、私は血気盛んに、そこへ入って世界中飛び回りたいと思っておりました。そして念願叶って内定をもらったんです。それで喜んだんですけれども、そこで私に思わぬことが起きました。

父の癌と死

親父が食道癌になったんです。食道が癌でつまってしまいました。医者に診てもらったから「あと一年」と言われたんですね。手術が成功してもあと一年と言われました。私二十二歳、母が四十八歳、親父が五十三歳の時でした。私は非常にショックでした。私の親父は非常にお酒が好きで、ウイスキーを水割りせんと、どしどし飲んでおった男でして、体が悪くなるのは当然なんですね。食道が本当にいかれてしまいました。癌でいっぱいになって、食べ物を通らないようになりました。そんなふうに後一年と言われて、それまで大きな人生の荒波は特になかったんですけれども、それが私には非常にショックでした。私もショックでしたけれども、母が落ち込んでしまいましたね。母は親父が死ぬということに耐えられなかつたんです。親父の闘病生活はものすごく痛々しいものでした。癌の末期は見えないほど痛々しいものです。そして癌の患者さんばかりの病棟へ入りまして、初めて私は、人間は何が起こるか分からないと思いました。病気になって、自分が死ぬと分かって泣いている人をたくさん見たわけです。親父には告知いたしました。家族会

議を開きまして、「お父さんは癌だよ」と知らせました。それでも親父は、息子の私が言うのも何ですけれども、最後の一年は非常に立派でした。自分が死ぬということを受け止めたんです。私は父の一年の闘病生活に感動いたしました。あまり愚痴を言わずに、これだけ酒を飲み過ぎて健康を損なった、自業自得やと受け止めました。「人生というのはケセラセラや」と言うたわけでございます。ケセラセラはスペイン語で、またインターネットで調べていただいたら出てきますけれども、人生というのはなるようにしかならない、思い通りにいくこともあるけれども、いかないこともある、おまかせするしかない、という意味です。親父はそう言いました。辛かったですでしょうけど自分が死ぬということを受け止めたんです。私は非常に感銘を受けました。親父の話をするとならで終わってしまいましたが、でも大事な話でして、そういうことが私の宗教との出会いにもなりました。しかし、母はダメでした。母は毎日泣いておりました。「お父さん死ぬの?」「もう地球が爆発したらええ」と、絶望してしまいました。父は闘病生活一年、五十四歳で死にました。私はいくらこういう事態が起こったので、内定していた会社に行けなくなってしまいました。この話はきりがございません。

思いもよらぬ事態

私はニューヨークで十一年生活をしております。それを映画にしたいと、生活をドキュメンタリーフィルムに撮りたいという映画監督がいらつしやいまして、四年前に撮っていただきました。『ピュアランド』日本語で、お浄土でございます。ここは浄土真宗の大学ですけれども、浄土は英語で Pure Land と言います。その映画を観ていただきましたら全部出ております。あまりにも母の落ち込みが大きくて、私は行きたかった会社を断念せざるを得なくなりました。そこから私は「なんでや」と。「何で自分の思い通りにいかないんだ」と。特に「お母さんは何で僕の人生を潰すようなことをしたんだ」と、非常に悔しい思いをしました。それから自分では全然考えていなかった銀行に勤めるようになったんです。私は学生時代に銀行に勤めたいなんて、これっぽっちも考えてなかったんですけれども、親父が死んだ事情によりまして、そこへ行かざるを得なくなつたんですね。それが私の人生の行き詰まりの始まりでした。まあ、ここで行き詰まったことが良かったんです。が、それは後々分かることでして、その当時は「なんで俺はこんな人生を歩まなあかんの

や」、特に自分を最も理解してくれるはずの母に「なんでお母さんが私の人生を邪魔したんや」と、母とはとても距離ができてしまいました。はつきり言って恨みました。それはまた『ピュアランド』を観ていただければと思います。こちらでも上映してくださると思いますが、詳しく出てきます。

あるおばあさんとの出遇い

そんなことで、私は二十二、三の時に、思いもよらぬ人生を歩まざるを得ない、悔しさを体験いたしました。そこで、たまたま、この状況を見てくれていた大学の先輩が「名倉、辛いな、大変やな」「お前にぜひ紹介したい人がおる」と。そして、自分が下宿している大家さんのおばあさんがなかなかの人で、何でも相談できる人やからと、私の父の死の前後に、その先輩の紹介で、神戸にお住まいの加藤辰子さんというおばあさんに導かれたんですね。これが私の仏様の教え、仏教とのご縁の始まりです。私より五十も年上のおばあさんでしたけど、ただならぬものを感じたんです。このおばあさんは身体には三つぐらい病気を抱えてはりましたけど、心は何とたくましい、どのような逆境が来ても受け止

めていける人やなと感じたんです。すごい心の力を持っている人やと。私はこのおばあさんに魅かれました、「名倉さん、いつでも気軽に遊びに来なさいや」とおっしゃっていたきましたので、「おばあちゃん、僕は何でこんなに辛いんや。お袋は何で理解してくれへんかったんや」「銀行の仕事は面白い」という愚痴ばかりやっただけですけど、しょっちゅう神戸まで会いに行っていました。「ああ、そうかいな。うん、よう分かりませ。あなたのお母さん、そうやからな……うん、うん」と、よう聞いてもらいました。そして、「せやけどね、名倉さん。あなた外ばかり見てんね」と言われたんですね。「お母さんがどうやからあなたの人生が不幸やとか、銀行がバブル経済でおかしいとか、名倉さんは外ばかり批判してんねん。あなたはどうなんですか」「全然自分が見えてない。名倉さんは、自分が偉いと思てまっしゃろ」と。その当時、私は本当に自分が見えてない。名倉さん（笑い）。自分ほど偉いものはないと思てました。加藤さんのおっしゃる通りです。あのせいで私は不幸な人生を歩んでるんやとか、全然、自分が見えてないんですね。そういうことを加藤さんはタタツと言わりました。「名倉さんは、仏教というものをご存知ないと思いますけれども、仏教は“内観”やねんで」。内を観ると書きまして内観、これは非常に大事な言葉です。「どこまでも自分が見えるようになっていかなあかん」とおっ

しゃいました。加藤さんは商売をなさって非常にお忙しい身だったんです。「私はご存知のように病氣も抱えておりますし、商売もある、子育てもせなあかん……」。ご主人がとくに亡くなっていたんです。女手一つで男の子二人を育てあげ、非常に忙しい身でありましたけれども、「何をさておいても、仏様の教えを聞くことを最優先に來ました」「仏法聴聞、それほど大事なことなんですよ」とおっしゃいました。

私は仏法の仏の字も、仏様の教えも何も知らない身でありました。「仏とは何ぞや」と。親鸞聖人のお血筋の蓮如上人直筆の前で話をさせていたのは恐縮です。ここには南無阿弥陀仏と書かれていますが、何のことかさっぱり分からない私でした。けれども、加藤さんが「名倉さん、私はね、人生のあらゆる難しい問題を、いつもお坊さんに相談に乗ってもらいました」。お坊さんもたくさんいらっしゃいますけれども、「大阪に、真宗大谷派の蜂屋先生という明治生まれの先生がいらっしゃるじゃないか、左行つたらいいか、本当に大事な問題の時に相談に乗っていただきました」とおっしゃいました。そして私に蜂屋先生の本をくださったんですね。その浄土真宗の教えは誰にでも分かるように書かれていました。私は母を恨んできましたが、そういう問題をどう解決したらいいか、

また、銀行の仕事が合わない、辞めた方がいいのか、辛抱してやった方がいいのか、なかなか解決策が見つからなかったんですが、今から三十何年前、幸いにも私はこの蜂屋先生のお寺に行くことになりました、そして何も知らなかった仏教の教えを聞き始めることになったんです。これは不思議なご縁でございました。その中でも、浄土真宗の教え、親鸞聖人の教え、特に東本願寺の教えにご縁をいただきました。

聞法生活が始まる

最初の段階ではさっぱり分かりませんでした。仏とは何ぞや。お浄土とは何ぞや。救われるとはどういうことや。悟りとは何ぞや。南無阿弥陀仏ってどういうことだよと。「なんなんだよ、なんなんだよ……」と、お念仏を称えることにどういう意味があるのか、さっぱり分からなかったんですけど、自分の苦しい問題を解決しなくちゃ人生前へ進めないで、自分の頭では解決できないことを仏さんのお智慧を借りて解決したいと、説法を聞きに行ったわけです。

先ほど三帰依文をみなさんと唱和しました。その一番初めに、

人身（にんじん）受け難し、いますでに受く。

仏法（ぶつぼう）聞き難し、いますでに聞く。

とございました。「人身受け難し、いますでに受く」。人間の身を受けたということは、どれほどか不可思議なことであります。「仏法聞き難し、いますでに聞く」。仏法を聞くという縁は、なかなか出てこない。

この世の中には何ほでも楽しいことはございます。映画を観たり、友達と遊んだり、旅行に行ったり……、何で仏法みたいなもんを聞かなあかんのやと、仏さんの教えに一体どういう意味があるんやと、たくさんの方が思っついていらつしやると思います。しかしながら、みなさまが、この京都光華女子大学、短期大学部にご縁を得ているということは、どれくらいでございます。それは後ほど分かると思います。

今日は宗教講座ということですが、宗教と言っても広いですね。イスラム教、キリスト教、ユダヤ教……、その中でも仏教の教えを聞く、その中でも浄土真宗の教えを聞くことが、どれほどありがたいことか、私は後々にいただけただけでございます。心の底からいただけたんです。ですから私は、どうしてもお坊さんとして歩みたい、自分の一番やりた

いことはお坊さんや、となつたんです。私自身が仏様の教えに救われたので、一人でも多くの人に出会ってほしいという念願が出てきたんですね。仏様の教えには漏れがない。どんな人でも救うぞと。これはほんまなんです。こんな悪いことをした人は救わないとか、こんな失敗をした人は救わないとか、そんな浅はかな考えを持つている人は救わないとか、そんなことはないんです。どんな人間でも救うぞ、というのが本当の仏様の教えでございます。中でも浄土真宗の教えはそのことが非常にハッキリしております。それが阿彌陀様の救いです。

そんなことで、私は何も分からない人間やったんですけど、二十代の初め、銀行勤めをしながら、大阪の蜂屋先生のところへ、一回も欠かさず、トータルで一〇〇回以上、二十年以上に渡って聞いてきました。大阪のお寺、ご本山の東本願寺、それから京都光華女子大学にも、まだ若い頃に一、二回聞きに来たことがあります。先ほど申しました私の師匠のお父さんは蜂屋賢喜代先生、師匠の蜂屋教生先生は十二年前に百一歳でお亡くなりになりました。この蜂屋先生の弟さんが、ここの学長さんだったんです。蜂屋慶先生です。そんなことで私は光華さんとは非常にご縁が深いんですね。

お釈迦様の出家

仏教は、お釈迦様が悟られた内容が教えになっていきます。お釈迦様は二五〇〇年前に実在した、インドの北部、ネパールの王子さんです。王子さんでいらっしやいますから、欲しいものは何もかもあるわけです。王様になることも決まっております。食べ物も不足ないですし、服もなんぼでもあるし、また、結婚されて、奥さんもいらっしやいましたし、子どもさんもできた。何不自由ない生活をされておったにも関わらず、何で出家されたかということですか。何で仏の道を求められたか。なんぼお金があっても解決できない問題があります。なんぼ社会的地位があつて、みなさんから「偉い人や」と言われても解決できない問題があります。なんぼ健康であつても解決できない問題があります。そういうものにもぶち当たったからです。みなさんの中にも、もう、ぶち当たっている方もいらっしやるかもしれません。私は、親父が病気になつて死んだということ、初めてそういう問題にぶち当たるんです。お金では解決できない。私が健康であつても仕方ない。また、母も、親父が死んでこれほど悲しいことはない、親父のことが大好きな人でしたから、「もう

地球が爆発したらええ」と言いました。そんな心に大きな穴が開いた人の悲しみは、なんぼお金があつても解決できません。この世におきまして、富や健康では解決できない問題があります。その問題を解決できるようにならなくちゃ、本当の人間としての幸せはないんだとお釈迦様は気づかれたんです。お城の中にいたら何不自由なく暮らせるにも関わらず、出家されたわけでございます。みんな捨てて本当の道を求められたんです。これは歴史的事実です。

静坐 もたれずに腰を立てて、下っ腹に力を入れる

私もインドへ行きました。十二年間勤めた銀行を辞めて、今から二十四年前、一九九九年にインドのお釈迦様が悟りを開かれた聖地へ参りました。ブツダガヤという所でございます。お釈迦様はそこで、三十五歳の時と言われていますが、静かに瞑想をされました。瞑想は他の言葉で坐禅、静坐とも言います。静かに坐られたんです。これが非常に大事です。私もこの静坐を蜂屋先生におしえてもらいました。決してもたれずに腰骨を立てて、地球の引力にピタッと合わすように、鼻から、息を長く吐きながら、下っ腹、丹田に力を

入れていくんです。私はこれを三十年來やっております。今でももたれておりません。もたれないのがどれほど大事か私は教えてもらいました。電車の中でももたれません。新幹線の東京——大阪間でももたれません。もたれないことがどれほど大事か、みなさんにお伝えしたい。みなさん当たり前のようにもたれた生活をされていますが、私は「もたれちゃいけませんよ」ということを教えてもらいました。本当にもたれないようになりました。それは、たまには疲れた時は、電車の中で眠たい時にはもたれます。しかし、たいいてい、腰骨を立てています。そうしますとシャキツとして頭が空っぽになります。頭が空っぽになるということが大事です。私ども人間が何で苦しむのかと言いましたら、この大きな頭で朝から晩まで、ぐちゃぐちゃぐちゃ……と。私でしたら、「お母さんがあんなことしたから許せない」。会社に行ったら行つたで、嫌な上司がおりますので、人間関係に苦しみます。みなさんもいろんなことで苦しんでいらつしやると思っています。お父さんやお母さんが私に対して無理解やと、悩んでいらつしやる方もいると思います。あの人は何であんなきついこと言うんやると、絶対嫌やと、どうしても合わない人もいます。人間はどうしても人間関係で一番悩みます。それはみんなこの頭の中で悩んでいるわけです。自分の思い通りにいかない、「あの人さえおらんかつたらなあ」「あの人が邪魔や」「なんであんな

なきついこと言うんやろ」。みんな頭の中の出來事なんです。ですから、頭でごちゃごちゃ考えないようになったらええわけです。腰骨を立てて、鼻で息を吐きながら丹田に力を入れる訓練をすることがなぜ大事かと言ったら、頭を空っぽにする時間を作ってくれるんです。空っぽになると自分の思いにぐちゃぐちゃ左右されない時間ができます。これは非常に結構なことです。本当でございます。われわれのストレスというものは頭の中でごちゃごちゃ考える。お釈迦様がされたように、私は蜂屋先生から学びましたこの静坐を、もう三十年以上、毎朝三十分必ずやっています。そして寝る前も坐ります。私自身もこの頭をほったらかしとったら、自我に振り回されて朝から晩まで苦しいわけです。「あの人が悪い」「なんでほくはこんな不幸な人生なんやろう」「なんでこういうことがでてきたんやろう」と。「まさか」ということが人生には起きてきます。なんでこんな目に会わなアカンねやと。これからみなさんも、いろんなことに遭遇します。ですから、まず私がお伝えしたいことは、お釈迦様がされたように、静かに坐る時間を作る、ということ。光華女子学園では小学校から「黙想」の時間を取っていらつしゃると聞いております。静坐と同じことですが、静かに坐る時間をぜひとも取っていただきたい。これは私の心の底からの願いでございまして、具体的にどう坐ったらいいかは、また、そのためやった

ら私は何度でも参ります。ニューヨークから駆けつけますので、静坐をお伝えする時間があるんやったら。私は世界中に行っております。先々週もイギリス、フランスへ行っていました。イタリアにも参りました。南米にも参りました。静坐をお伝えしに世界各国に参ります。全米各地、ニューヨーク市立大学でも毎週やっております。それと同時に浄土真宗の教えをお伝えしております。もちろん、朝から晩まで頭を空っぽにすることはできませんけれども、そういう時間ができます。そうして自ずからどんなことに気づいたかと言いますと、このプリントに私にとって一番大事な言葉を掲げております。

お釈迦様のお悟りを一言で言いましたら、

天上天下唯我独尊

って、聞いたことがありますか。お釈迦様はお生まれになって、七歩歩まれて、「天上天下唯我独尊」と言われたと伝説的に言われております。もちろん、赤ちゃんが立って、そんなこと言うわけありません。言うわけありませんけれども、ずっと伝わってきているということは、どえらい意味がございます。「天上天下唯我独尊」つまり、天にも地にも、こ

うして私が存在しているということが、それだけで何の条件もなく尊いことや気づかれたいのがお釈迦様なんです。

私は、私の力で生きていくわけではございません。自分の力で生まれてきたわけじゃありませんね。私は六十一年前に、父の精子と母の卵子が合体して、小さい小さい目に見えない細胞から、知らんうちにこんなに大きくなつとるわけでございます。不思議じゃないですか。これほど不思議なことがございますか。何で私はこうやって今思う存分話ができますか。お話しできる力も備わっているわけです。こないして手が動きます。気がついたら指が十本あります。何ですか。ほんまに不思議なことです。父の精子と母の卵子が合体した単細胞から始まつたんじゃありません。その前、前、前、がございます。父の精子と母の卵子と、また父も母も同じように、父の父母の精子と卵子が合体して、一つの細胞から大きくなつたわけです。これをずーつと辿りましたらどうなるんですでしょうか。私は六十一年前の八月十九日に「おぎゃあ」と言つたわけですが、私のいのちの始まりはどこまでも過去に遡れます。これはほんまなんです。どっかからポコッと生まれてきたわけではないわけです。どこどこまでも遡れる。みなさんもお考えになつてください。ほんまなんです。つまり、無量のいのちなんです。無量のいのちを生きとるわけです。宇宙の始

まりが私の生命の始まり。みなさんもそうなんです。今、十八か、十九でいらっしやいます。年齢は十九とお答えになると思いますが、仏様の世界で言うたら無量のいのちなんですわ。

ですから、それを、

われわれの生は、われわれの記憶も届かない深いところから来ている

今生きているというこの事実は、ほんまに考えたら、記憶も届かない深いところから来ておりまして、それを次の言葉、

私たちのいのちは、ただ不思議ということに支えられてある

私がこないして生きているということは、全ての関係性において、太陽も影響しております、お月さんも影響しております、あらゆる星も影響しております。時間と空間のあらゆる縁が、私というものになってくださるとるんです。自分の力で生まれてきたわけじゃ

ございません。本当に今、こうして自由自在にお話しできる力もみんな、いただきものな
んでございます。いただいとるわけでございます。これを仏教の言葉で「他力」と言いま
す。みんないただきもんでございます。

みなさまはご存知でございましょうか、今年、ニューヨークに長年いらっしゃった坂本
龍一さんという世界的な音楽家が亡くなりました。私はある公園でバタツとお会いしたこ
とがございます。すぐ分かりました、坂本龍一さんです。福岡伸一先生という、生命学者
がいらっしゃいます。私の大好きな先生です。この福岡先生と坂本さんの対談が何年前か
にあったんです。その再放送をこの間、NHKのスイッチインタビューか何かでたまたま
見たんですね。ニューヨークのロックフェラー大学というところで取材された放送でし
た。そこで福岡先生は命の不思議さを感動をもって話されているんです。その時にです
よ、坂本龍一さんがパッと言わはったんです。あ、それは三浦梅園の「枯れ木に花咲く
に驚くより、生木に花咲くに驚け」ということですねと。普通われわれは枯れた木に花が
咲いたら「うわー、枯れた木に花が咲いた、何でやろう」と驚きます。三浦梅園は十八世
紀、江戸時代、大分県の人です。私、実は今週、日、月、と大分県に法話をしに行ってい
たんです。この三浦梅園記念館にも行って来ました。三浦梅園はどえらい人でして、「枯

れた木に花が咲くのをみなさん驚いて当たり前やけど、生木に花が咲くのを驚け」と言うんです。普通に生きている木に花が咲くこと自身が不思議じゃないかと。普通の花が、そこらへんにある雑草でも、花が咲くということ自体が、もう不思議なんですよ。みなさまで言い換えたなら、こうして今、みなさんが座ってお聞きになつると言う、このこと自身がどえらいことなんでございますね。みなさんはお聞きになる力がございますですよ。そしてそれをもってまた頭で考える力がございますでしょ。これ不思議なことなんです。何でそんなことができるのかと。つまり、

あたりまえと思っていることこそ、吟味してみなければならんです

普段見逃しているような当たり前のこと。二本足で立てる。よう考えたら目が二つついとる。ものを食べて味わえる。夕陽を見て「うわー、今日の夕陽きれいやなあ」と何で感動できるんですか。不思議じゃないですか。感動する心を持っているからです。また、何かのことで涙を流すことがありますね。何で涙が出るのか。私も普通の人間で、いろんな差別する心、人を下に見てもうたり、俺の方が上やと、俺の方が偉いとか、非常にやらしい

根性を持っているんです。ものすごくドロドロした。どうしても自分が偉いと思ってしまう、人を下に見たり、あの人より俺の方がマシやとか、いろんなことを思ったり、こういうのを煩惱と言います。人を差別する心を持つてるんです。これは拭えない。正直に申します。どうしようもない。しかしながら、こういう人を差別する心もいいたいとるわけでございます。この煩惱、怒り、腹立ったり、「あの人にはできてない人やな」とボロカスに思ってしまったり、言ったり、そういう心もいいたいとるんです。浅ましい心もいいたいとるわけです。そんなことを、だんだんだんだん、気づかせていただきまして、まあ、何と言いましようか、だんだんだんだん、私の問題が解決いたしました。私は親父が死んだことによつて、母がある異常な行動をとつて、自分の行きたい会社に行けなくなつたので、母に対して非常な恨みがあつたんですけど、その問題を引つ提げて仏法を聞くことによりまして、だんだんだんだんと、自分が苦しんでんのは全部自分の思いであると気づきました。いつまでお母さんがどうの言うてるんや、お前はと。もうすんでしもうたことやないかと。また母が、あの時にああいうふうな異常な行動をとつて私が内定を取つていた会社に行けなくなつたことも、お母さんはあの時、親父が死んでもものすごく寂しかったんやということが、心の底から理解できたんでございます。お母さんはあの時、あんな

な行動を取らざるをえんぐらい寂しかったんやと。正直言います、灯油をかぶったんです。私の目の前で灯油をかぶりまして私の就職に反対したわけでございます。灯油をかぶるような衝動に出た母、もう耐えられなかったんや、父が死んだ悲しみがですね、ということが私は心の底からいただけるようになりまして、「お母さん、有難う」となったんです。なぜならば、私は仏教に出遇わなかったら、いつまでも母を憎んでいました。

この世界でわれわれは、自分の思い通りいったら幸せ、自分の思い通りいかなかったら不幸せと、分別（ぶんべつ）をしています。この分別の世界だけで私は勝負するところやっただんです、何にも仏教と出遇わんとですよ。しかしながら私は、どれほど幸せかと言いましたら、本当に母のお陰で仏教に出遇わしてもらいまして、分別を越えた世界に出遇わさせていただきましたんです。分別を越えた世界というのは仏さんの世界でして、それは全部包み込んでくださる世界でして、あんたがそのまま、こうして存在しているだけで尊いんだよと。何をしたら幸せやとか、成功したら幸せやとか、そういうことじゃなく、あなただけでこうして存在している、そのものが尊いんだよと、自分の存在に感動するということが出てきました。

私もみなさんも、これからの人生に何が出てくるか分かりません。自分の思いだけでは

間に合わない世界がございます。どうしようもなく苦しいことも出てきます。しかし、仏さんの教えに出遇って、真剣に尋ねれば、ここに書いてございます、「南無阿弥陀仏」ということがいただけるようになります。

念仏というのは、心を仏様の世界とつなぐこと

仏さんに何か自分の欲望を叶えてもらおうと思って、「南無阿弥陀仏」と念仏するんじゃない、
なく、「こうして今日も命をいただいております。ありがとうございます」ですね。

そして、私の一番好きな言葉です。これだけは覚えておいてほしいと思って一番最後に
出しました。「妙好人 因幡の源左」という、今の鳥取県に源左さんというお百姓さんが
いらっしやいました。一九三一年あたりに亡くなっておられますけれども、この方は字も
読めないお百姓さんです。しかしながら、親父が死んだ（私と一緒です）ことをご縁とし
て、真剣に道を求められまして、仏様のメッセージに出遇われたんですね。

ようこそようこそ、有難うござんす、なんまんだぶ、なんまんだぶ

この人は自分の息子さん二人が先に死んでいきます。子供さん四人とも先に死んでいきます。そんな辛いことが起こったにも関わらず、どのような自分にとつて辛いことも、「ようこそようこそ、有難うござんす、なんまんだぶ、なんまんだぶ」と受け取っていかれました。

みなさまも、これから、思いがけない苦勞をされることもあると思います。しかしながら、みなさんの幸せは、この京都光華女子大学、短期大学部に、もうご縁を得ているということです。今はまだそこまで求めていないかも知れませんが、必ず、ものすごい苦しい時には仏様のメッセージが丸ごと救ってくださいます。ですから、どうかどうか、みなさまこのご縁を大事にしてください。みなさんと今日お会いできたことは本当にありがたいことでございます。

それでは今日のお話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございます。